潜在的社会的認知研究の進展[1]

――IAT（Implicit Association Test）への招待――

潮村公弘・村上史朗・小林知博

＜はじめに＞

我々は本邦におけるIATをはじめとする潜在的社会的認知研究の今後の進展に寄与することを企図し，2002年日本心理学会第66回大会（広島大学）で自主企画ワークショップ「潜在的社会的認知研究の進展：IAT(Implicit Association Test)の課題と将来性」を実施した。

本報告は，このワークショップの内容報告という形式をとり，ワークショップでの話題提供者3名の話題提供内容を中心的にとりあげたものである[2]。なお，現段階では学術論文としてまだ公刊してはおらず，その準備中である研究についての紹介部分を中心として，未発表論文として性質を保持するため等の理由により，実際の報告内容を大幅に加筆・修正してある部分もあることをお断りしておきたい[3]。

＜企画主旨（抄録集より再掲）＞

この10年来，社会的態度・社会的認知研究で最も注目されてきたトピックは，自動的・非意識的に機能する潜在的態度・認知を測定可能とする手法の探究と，そのはたらきの特定化であったと言えよう。この流れの中で登場してきたIAT（Implicit Association Test）は，概念間の連合強度はカテゴリ分類課題のスピード・容易さとしてあらわれるとするアイディ

---

[1] 本論文は，2002年9月の日本心理学会第66回大会（広島大学）で行なわれた自主企画ワークショップ「潜在的社会的認知研究の進展：IAT（Implicit Association Test）の課題と将来性」の内容報告という形式をとりながら，IATについてその原理，方法論，応用，そして筆者たち自身による研究も含めた実証研究例の概要を紹介していくスタイルを採用している。日本心理学会でのワークショップは，潮村公弘が企画者の役割を担い，また潮村公弘（信州大学人文学部）・村上史朗（東京大学大学院人文社会系研究科）・小林知博（大阪大学大学院人間科学研究科）が話題提供者となり，この3名が全体的な構成について相互に相談しながら準備を進めた。

[2] 当日の日本心理学会自主企画ワークショップでは，3名の話題提供者に加え，岡　隆先生（東京大学大学院人文社会系研究科）には司会者を，笹山郁生先生（福岡教育大学教育学部）には指定討論者をお願いし，当日のワークショップの充実にご尽力いただいた。本誌の厳格な分量制限のために，先生方のご発言については今回，収録できなかったことを深くお詫びしたい。また，2000年3月20日に米国にてTV放映されたThe Discovery Channel Programの内容紹介についても紙面の制約上，割愛した。

[3] 各自の研究内容発表の箇所に関しては，一部の研究については既に学会発表あるいは論文化がなされており，また一部の研究については現在，投稿にむけて準備を進めている段階である。具体的な研究紹介という側面を重視するとともに，かつ，正規の研究発表との二重投稿を避けるために，当日の発表内容からの削除等を必要性に応じて適宜行った。加えて，未発表の実証研究部分についての内容は，今後，正規の発表に向けて内容・記述が変わりうることがある点についてお断りしておく。また，当日にパワーポイントで呈示した内容も一部収録し，この後の本邦での研究進展に寄与できるようなスタイルを目指した。

アをベースとし，潜在的なレベルでの概念間の連合強度を測定することを目的としている。この手法の開発により，たとえばマイノリティについての態度など，顕在的には態度と行動との間の相関が低いとされてきた問題に関し，新たな知見が多数の研究によって提供されてきている。またIATは，実施スタイルが多様であることや実施上の制約が少ないことからも大きな注目を集めている。JPSP誌が2001年11月号で企画した“Implicit Prejudice and Stereotyping”特集は，その掲載論文の全てにおいてIATが用いられていることからも，実質的には「IAT特集」とも位置づけられうるものであり，IATに対する注目度の高さをうかがい知ることができよう。本ワークショップでは，IATの開発に携わってきた海外の研究者と直接的な交流を持ちながら進めてきた実証研究について取りあげ，知見，問題点，将来の発展可能性について討論していきたい。

＜ワークショップでの役割とワークショップの内容構成＞

企画者：　潮村　公弘（信州大学人文学部）
司会者：　岡　　隆　（東京大学人文社会系研究科）
話題提供者：潮村　公弘（信州大学人文学部）
　　村上　史朗（東京大学人文社会系研究科）
　　小林　知博（大阪大学人間科学研究科）
指定討論者：笹山　郁生（福岡教育大学教育学部）

またワークショップでは以下のメニューが存在していた〔敬称略〕。

企画意図とこれまでの経緯について	（潮村公弘）
司会の挨拶と“Dialog”Newsletterの紹介	（岡　　隆）
TVプログラム（The Discovery Channel Program）紹介	（潮村公弘）
IATの一般的手続きについて	（村上史朗）
実証研究紹介1	（村上史朗）
実証研究紹介2	（小林知博）
実証研究紹介3	（潮村公弘）
SELF関連研究以外のIAT研究	（小林知博）
指定討論	（笹山郁生）
指定討論に対するリプライ	（村上，小林，潮村）

＜IATのアウトライン＞

（村上　史朗）

IATを用いるメリットの1つとして，自己呈示・自己欺瞞の影響を比較的受けないという側面がある。顕在的な指標で態度などを測定した場合には，社会的に望ましい方向への自己呈示・自己欺瞞といったものが不可避的に含まれてしまう。間接的な指標である潜在的認識指標であるIATを用いることによって，そのような自己呈示・自己欺瞞の影響を低減できるという特徴がある。

では，IATで測定されているとされる潜在的な態度とはどのような概念だろうか。

Greenwald & Banaji (1995) によれば，潜在的態度は，「社会的な対象への好ましい，あるいは好ましくない感情，思考，行為を媒介する，内省的に識別することのできない（または，正確に識別できない）過去の経験の痕跡」と定義されている。このような潜在的な態度として，過去の経験によって自動化されている知識の概念間の連合を測ることを目的としたのがIAT という手法である。プライミングやネームレター効果など他の潜在的な認知指標と同様に，自動的な過程を対象としている。

IAT で概念間の連合はどのように測定されるのだろうか。前提として，連合の強い概念のペアというのは，連合に弱い概念のペアよりも同じカテゴリに分類しやすいということが挙げられる。主にコンピュータを用いて刺激語への反応時間を測定することにより，連合強度の指標とする。具体的には以下の通りである。被験者はコンピュータの画面上に表示される一連の刺激語に関してできるだけ早く，概念と特性のそれぞれ2つのカテゴリのいずれに当てはまるかを判断して，対応するキーを押すという形で行う。例えば，「花」と「虫」に対する潜在的態度を測定するIAT 課題の場合には，被験者は，①「花」または「快」と「虫」または「不快」の弁別課題と，②「虫」または「快」と「花」または「不快」の弁別課題，の2種類の課題を行う。前者の課題では，刺激語が花または肯定的な単語である場合は左のカテゴリに対応し，虫または否定的な単語である場合には右側のカテゴリに対応する。また，後者の課題では，刺激語が虫または肯定的な単語である場合に左側のカテゴリに対応し，花または否定的な単語である場合に右側のカテゴリに対応する。それぞれの課題の平均反応時間を算出し，その差を組み合わせた概念間の連合強度の指標とし，反応時間の短い組み合わせの連合が強いと解釈する。この例の場合，①の課題の平均反応時間が②の課題の平均反応時間よりも短ければ，潜在的に虫よりも花に対して肯定的な態度を持っていると判断することになる（Figure 1参照）。

続いて，具体的な判断課題の構成例を紹介する。ブロックの数や，各ブロックでの試行数は研究間で一貫してはいないが，基本的には以下の通りである。先ほど例に挙げた「花」と「虫」に対する潜在的態度を測定するIAT 課題の場合，以下の5つのブロックから構成される。課題は順に，①「快」－「不快」の弁別課題（20試行），②「花」－「虫」の弁別課題（20試行），③「快」または「花」－「不快」または「虫」の弁別課題（40試行），④

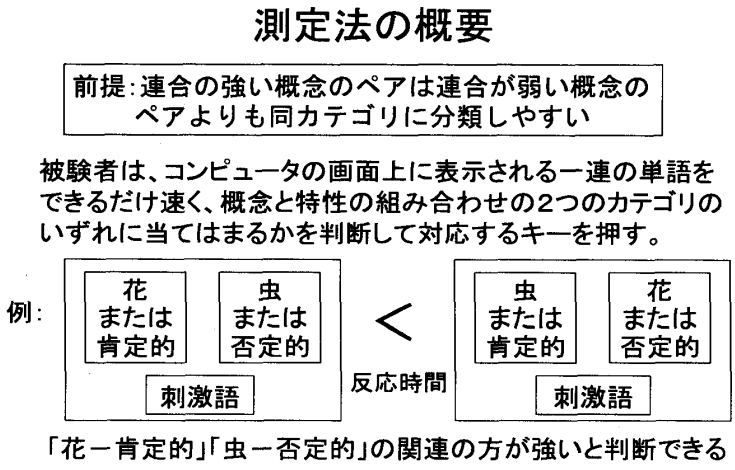

Figure 1：IAT での概念間の連合強度測定の概要

「虫」－「花」の弁別課題（20試行），⑤「快」または「虫」－「不快」または「花」の弁別課題（20試行），のような形で構成される。2種類の判断課題を組み合わせた3番目と5番目のブロックの平均反応時間の差が，「花」「虫」に対する「快」「不快」の潜在的な連合の強さの相対的な指標となる。1番目・2番目のブロックは，それぞれ組み合わせ課題で用いる概念を左右にカテゴリ分けする練習課題である。また，3番目と5番目のブロックは組み合わせが異なっているため，左右の反応が入れ替わる部分に関して，4番目のブロックでもう一度「花」と「虫」を入れ替えた練習課題を行う。また，課題への慣れなど，ブロックの順序によって反応時間に影響が生じる可能性があるため，半数の被験者には2番目・3番目のブロックと4番目・5番目のブロックの順序を入れ替えてカウンターバランスが取られるのが一般的である。このように，典型的なIAT課題は，データ収集ブロックの前に練習試行のブロックを配置するという形で構成される。

他の潜在的認知指標と比べてIATが持つメリットとして，以下のような点が挙げられる。まず，潜在的認知指標の中で比較的信頼性が高いという点である。Bosson, Swann, & Pennebaker（2000）は，IATは潜在的認知指標の中で再テスト信頼性（test-retest reliability）が高いことを示しており，比較的安定した結果が得られる指標であると言える。また，測定している連合がどの概念間のものなのかが比較的明確である。IATでは，課題の特性上，連合が測定される概念の組み合わせが明示的に示されており，プライミングなど他の潜在的認知指標と比べ，測定されている連合が明確であると言える。また，実験実施上のメリットとして，特殊な装置や環境が不要であり，比較的短時間で行うことができる点が挙げられる。コンピュータを用いた課題であっても一般的に普及しているＰＣで実施可能であるため，敷居の低い実験法であると言える。また，より簡略化した方法として，質問紙を用いて測定することも可能である。以下にその概略を述べる。

質問紙を用いてIATを行う場合，コンピュータの場合とは異なり，刺激語ごとの反応時間を算出する事はできない。そのため，各カテゴリ化課題に制限時間を設け，その時間内にカテゴリ化できた刺激語の個数を反応時間の指標とする。各課題において，用紙の中央に刺激語のリストを配置し，その左右にチェックボックスを設け，その外側にカテゴリラベルを表記する，という形式で各カテゴリ化課題を作成する。被験者は各刺激語について，対応するカテゴリラベルがある側のチェックボックスをマークするという形式で回答を行う。

質問紙でIATを行う場合，コンピュータで測定する場合よりも精度が多少落ち，回答ミスも生じやすいというデメリットがある。しかし，実施が簡単である，大量のデータを一度に確保できるなどのメリットがあるため，IATと他の指標の相関を検討するなど，大きなサンプルサイズが必要な時に活用しやすい手法と言えるだろう。

最後に，IATによる潜在的自己観の測定について簡単に説明する。IATは自己報告による回答に比べて意図的に反応を変えることが難しいと考えられるため，偏見や差別などの社会的に不適切とみなされる態度を測定する際に用いられることが多い。それと並んでIATが使われるのが，自尊心の測定である。自己報告によって測定される自尊心には，自己呈示戦略が影響し，必ずしも内在化され，自動化された自己に対する肯定的な感情を測定しているとは言えない。Greenwald & Banaji（1995）は，潜在的な態度に類する形で，潜在的な自尊心を「内省的に識別できない（または正確に識別できない）自己に連合した，あるいは

自己に連合していない対象に対する評価に基づく自己への態度の効果」と定義し，顕在的な自尊心と区別している。先に述べた潜在的態度と同様，IAT で測定されるのは内省できない連合であるため，自己呈示の影響は低減されると考えられる。

IAT を自尊心研究に用いることになったそもそもの目的は，北米で見られる自己肯定のバイアスが，自己呈示や自己欺瞞などの影響を除いてもみられるかどうかを検討することであった。北米で自己報告により測定された自尊心の尺度得点は，多くの場合自己を肯定的に評価する方向に分布が歪んでいた。そのため，北米において IAT を用いて自尊心を測定することは，自己を肯定する方向への，自己呈示などによる歪みを減少するという目的をもって行われていた。

しかしながら，この点に関して日本においては状況が異なる。これまでの比較文化的な研究から，日本人はアメリカ人やカナダ人と比べて相対的に自己卑下的であり，自己報告による自尊心の測定においても北米で見られるような自己を肯定する方向での分布の歪みが見られないことが指摘されている。日本人に見られる自己卑下的な傾向が，文化的な規範に従った自己呈示的な反応傾向であるのか，それとも自己を否定的に捉える傾向が内在化されているのかを検討する上で，潜在的認知指標である IAT による検討は重要な意味を持つと言える。

「日本人の自己・内集団に関する潜在的評価」

（村上　史朗）

これまでの比較文化的な研究から，日本人の自己観に関して顕在的な尺度を用いて測定した場合には，北米と比べて自己卑下的，少なくとも自己肯定の程度が低いことが指摘されている（e.g. Heine, Lehman, Markus, & Kitayama, 1999）。このような文化差がなぜ生じるのか，ということの解釈として，主に以下の２つが挙げられる。１つは，自己肯定の程度そのものに文化差があるという解釈である。つまり，日本人にとって自己卑下的な傾向というのは内在化されており，北米と比較してネガティブな自己観を持っているためそれが反映されているのだという解釈である。もう１つは，日本人の自己卑下的傾向は文化的な規範に沿った自己呈示であるという解釈である。これは，顕在的な自己観が，謙遜すること，控えめであることが望ましいなどの文化的な規範に沿う形での自己呈示として表れていると考える解釈である。顕在的な指標を用いた場合，自己呈示の影響を排除しにくいため，この２つの解釈は共に可能である。

本研究の目的

本研究では，自己呈示の影響を受けにくい IAT を用いて，日本人の潜在的自己肯定傾向を検討することを目的とする。既に，日本とは異なり自己主張的な文化的規範を持つアメリカで，潜在的にも自己肯定傾向があることが確認されている（e.g. Greenwald & Farnham, 2000）。本研究では，自己卑下的な規範を持つ日本人の潜在的自己肯定傾向が，アメリカと同様に見られるかを焦点として検討する。

本研究で用いる IAT のデザインは，基本的に，自己と対照概念（他者，友人など），快と不快の２種類の弁別課題を組み合わせる形で行った。連合課題として，自己と快，対照概念と不快を組み合わせる課題と，自己と不快，対照概念と快を組み合わせる課題を設け，前者

の連合課題の平均反応時間が後者よりも短い場合に，潜在的に自己肯定的であるとみなすことになる。このようなIAT課題を用いて，日本人の潜在的自己肯定傾向を測定した。

また，合わせてIATに関する以下のような方法論的な問題を検討する。まず，比較対象となる概念の問題である。IATはその手法上，目的とする概念と比較対象となる概念の弁別課題を用いて測定される。本研究の場合，目的とする概念は自己であり，自己と対になる概念が比較対象として必要になる。比較対象として一般的な他者を用いる場合，友人を用いる場合など，比較対象が異なる場合にIATの結果はどのような影響を受けるのかを検討する。また，用いる概念が同じであっても，異なる性質の刺激語を設定する事が可能である。この刺激語の性質に関して，以下の2点を検討する。第一に，自己に関して「私は」などの代名詞を用いる場合と，より具体的に自己に関連した情報（名前・出身地など）を用いた場合にIATで一貫した結果が得られるかを見る。第二に，快・不快に関して，一般的に肯定的・否定的意味を持つ刺激語と人の性質として用いられる肯定・否定的な刺激語を用いて，一貫した結果が得られるかを見ていく。また，コンピュータを用いて測定した場合と，質問紙を用いて測定した場合とで一貫した結果が得られるかを検討する。

以上のような側面を検討するため，筆者らがこれまで行ってきた日本人の潜在的自己肯定に関する一連の研究をから得られた知見を概観していく（山口・村上，2000；村上・山口，2001a；村上・山口，2001b)。

自己と他者・友人を対比したIAT（山口・村上，2000）

まず，自己と他者，自己と友人をそれぞれ対にしたIATの結果を報告する。この実験では東京大学の学生51名を被験者とし，自己・他者・友人の刺激語として代名詞を用いた。また，快・不快の刺激語は，本実験とは異なる19名の被験者を用いて，87の形容詞を評定させ，その結果をもとに各10語が選定された。実験の結果，比較対象が他者の場合でも友人の場合でも，自己と快を連合させた課題の方が，自己と不快を連合させた課題よりも有意に平均反応時間が短かった。また，比較対象が他者である場合の方が，友人の場合よりもその自己肯定傾向は有意に大きかった。ここから，比較対象となる概念によって程度の差はあるものの，いずれの場合も潜在的自己肯定傾向は確認されたと言える。

また，自己と他者を対にしたIATに関して，同様のデザインで質問紙を用いて測定した。放送大学の学生31名を被験者とし，刺激語は前述の実験と同一のものを用いた。各課題は実験者の指示によって20秒間で行われた。その際，1）できるだけ速く，かつ正確に回答すること，2）間違えた場合は修正せずに次の項目に進むこと，3）順序を飛ばさずに回答すること，という指示が与えられていた。各課題の制限時間である20秒を，その課題の回答数で割ることで，近似的な平均反応時間を算出した。その結果，コンピュータで測定したIATと同様に，自己と快を連合させた課題の方が自己と不快を連合させた課題よりも反応時間が有意に短いという結果が得られた。ここから，質問紙を用いたIATでもコンピュータを用いたIATと一貫して，潜在的自己肯定傾向が確認されたと言える。ただし，コンピュータを用いたIATと質問紙を用いたIATは被験者が異なるため，両者の相関はここでは検討できていない。

刺激語を変化させたIATによる自己肯定傾向の測定（村上・山口，2001a）

続いて，自己に関する刺激語として名前や出身地などの自己関連情報を用いたIAT実験

の結果を紹介する。前述の実験では，自己に関する刺激語として「私は」のような代名詞を用いていたが，ここでは自己に直接関連した単語を用いて，性質の異なる刺激語であっても一貫して自己肯定傾向が見られるかを検討した。ここで，自己関連情報と対になる概念として自己非関連情報を用いた。自己関連情報として取りあげた各項目について12の選択肢を用意し，被験者自身に自分に当てはまらない項目を選ばせるという形で刺激語を作成した。また，快・不快の刺激語は，Greenwald & Farnham（2000）に準じ，情緒的（affective），評価的（evaluative），という２種類の刺激語を用いた。情緒的な快・不快に関する刺激語は，「幸運」のような一般的な肯定的・否定的な単語であり，評価的な快・不快に関する刺激語は，「明るい」のような人の特性に関する単語が主に用いられた。東京大学の学生41名を被験者として，上記のような２種類のIATを行った。

その結果，一般的な肯定的・否定的な刺激語を用いた場合でも，人の特性を示すような刺激語を用いた場合でも，共に自己と快を連合させる課題の方が自己と不快な課題を連合させる課題よりも反応時間が有意に短いという結果が得られた。ここから，自己関連情報を自己の刺激語として用いた場合でも，また快・不快の刺激語の性質によらず，潜在的自己肯定傾向が確認されることが示された。ただし，この実験で用いた２種類のIAT間には有意な相関がなかった。ここから，刺激語によって潜在的自己肯定の程度が影響を受けること，またその影響には個人差があることがわかる。しかし，これらの影響はあるものの，全体的な自己肯定傾向は安定して得られている。

以上の２つの実験から，潜在的自己肯定傾向が安定的に見られることがわかった。日本人は顕在的には自己卑下的であるとされることから，顕在的な自己観と潜在的な自己評価でのパターンの違いがあると言える。

自己と内集団を対比したIAT（村上・山口，2001b）

続いて，自己肯定に関連する傾向として，内集団肯定について考えてみよう。顕在的には，日本人は自己卑下的であると同時に集団高揚的であることが示されている。この現象に関して，主に２つの解釈が考えうる。１つは，日本人の集団高揚は内集団他者高揚であるとする解釈である。この解釈では，内集団高揚は自分にとって重要な他者を高揚しているのであり，自己卑下とは矛盾しないと考える。もう１つは，日本人の集団高揚は間接的自己高揚であるとする解釈である。この解釈では，謙遜が望ましいなどの文化的な規範があるために，自己を直接には高揚しないが，内集団を高揚することを通じて間接的な自己高揚を行っていると考える。自己呈示の影響を受けにくい潜在的認知に関して考えれば，前者の解釈では内集団は自己よりも肯定的に捉えられているのに対し，後者の解釈では自己が内集団と同様，またはそれ以上に肯定的に捉えられていると予測できる。

ここでは，潜在的に自己と内集団のどちらにより肯定的であるかを，両者を対にした形のIATを用いて検討した結果を報告する。潜在的自己肯定は前述の２つの実験で既に確認されているが，比較対象を内集団にした場合でもその効果が見られるかに焦点を当てる。ここでは，自己と内集団を対にしたIATに加えて，潜在的な内集団肯定傾向を確認するために内集団と外集団を対にしたIATも合わせて行った。東京大学の学生51名を被験者とし，自己・内集団・外集団の刺激語としては，「私は」「我々は」などの代名詞を用いた。

内集団と外集団を対にしたIATでは，内集団と快，外集団と不快を連合させた課題の方

が，内集団と不快，外集団と快をそれぞれ連合させた課題よりも平均反応時間が有意に短く，潜在的な内集団肯定傾向が確認された。また，自己と内集団を対にしたIATでは，自己と快，内集団と不快を連合させた課題の方が，自己と不快，内集団と快を連合させた課題よりも平均反応時間が有意に短かった。つまり，潜在的な内集団肯定傾向はここでも確認され，内集団に比べて自己が相対的にポジティブに評価されていたことが示された。

本研究のまとめ

これまで概観してきた結果をまとめると，以下のようになる。まず，IATによって測定された潜在的自己肯定傾向は，全てのデータで一貫していた。ただし，自己と対にする概念の好ましさによって効果の大きさが変わる。例えば友人や内集団よりも他者と対にした方が効果が大きい。また，快・不快に関して性質の異なる刺激語を用いた場合，そのIATの結果が相関しなかったことから，刺激語の性質を変えると結果が相関しない場合があると言える。また，質問紙版を用いたIATもコンピュータ版と同様のパターンの結果が得られることが確認された。ただし，両者を同一の被験者を用いて測定していないので，今後両者が相関するかどうかという一貫性を検討する必要がある。また，日本人サンプルでは顕在的には自己に関しては卑下的であり，内集団に関しては集団高揚的である内集団と自己の関連について，潜在的には内集団よりも自己を肯定することが示された。

顕在的指標との関連

ここまでIATの結果のみ紹介してきたが，これらの研究を通じて同時に測定していたRosenberg（1965）の自尊感情尺度との相関に関して簡単に報告する。過去のIATを用いた研究で，潜在的自己肯定傾向と顕在的な自尊心の尺度の間に一貫した研究は見られていなかったが，ここで紹介した実験においても同様に，一貫した結果は得られなかった。0.3以上の正の相関が得られているのは，自己と友人を対にしたIATと自己関連情報と自己非関連情報を対にした評価的項目のIATのみであり，相関が出ていないIATの結果を含めての整合的な解釈は難しい。IATの結果と顕在的指標の関連は今後も継続して検討していく必要がある。

文化差に関する解釈

最後に，顕在的に見られる文化差についての解釈を述べる。日本人の自己観について，顕在的には自己卑下的な傾向が示されているのに対し，ここで報告したIAT実験の結果から潜在的には自己肯定が確認されている。これは，自己を肯定的に捉えるという点では文化に拠らず共通であるが，何が望ましいかという基準が文化によって異なるために，顕在的には文化差が生じると解釈できる。例えば，日本では謙遜のような規範が望ましいとされているため，顕在的に自己を卑下して表出することが自己肯定と矛盾しないと考えられる。逆に，北米のように自己主張をするという規範が望ましいと考えられていれば，顕在的に自己を高揚的に捉えることが自己肯定に一貫すると考えられる。この解釈の妥当性については，今後の研究で示していく必要があるだろう。

「日本人・アメリカ人の潜在・顕在的な自己概念比較」

（小林　知博）

はじめに

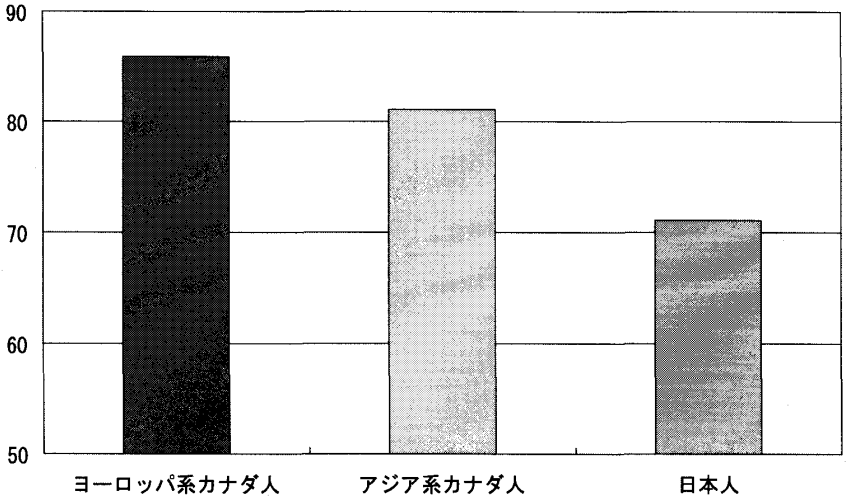

Figure 2：質問紙を用いた自己評価比較研究の例
注：Heine & Lehman (1999)を元に著者が作成。データ範囲は6-120

人々の自己概念が一般にどのような性質を持つものであるかについては，James（1892）を始まりとして社会心理学の中でも多くの研究がある。自己観の文化比較については，特にMarkus & Kitayama（1991）以来，多数の実証的研究が行われている（e.g., Heine & Lehman, 1999)。そしてそれらの多くは顕在的（自己報告式）測定法を用いている。その結果，北米人は自己をポジティブ視しており，日本人は自己をネガティブ視もしくはポジティブ視が低いことが頑健に示されている。Figure 2（Heine & Lehman, 1999より引用）からも明らかなように，先行研究において，自己肯定の度合いは一貫してヨーロッパ系カナダ人でもっとも強く，次にアジア系カナダ人，そして日本人という順序になっている。

ではなぜ日米で自己概念に差が出るのか，という疑問に対する解釈には，現在のところ下記の2種類が指摘されている。1つ目は「文化規範の内在化」で，もう1つは「他者に好印象を与えるための戦略」である。文化規範の内在化については，次のように説明される。日本での「出る杭は打たれる」に対し，北米では“The squeaky wheel gets the grease.（キィキィと音をたてる歯車が油を注入される）”という諺があるように，日本では人前であまり目立たない方が良いという文化規範が存在するが，北米では逆に，自己主張を推奨する文化規範が強力である。つまり「文化規範の内在化」とは，それぞれの社会で生活し，規範に従ううちに，例えば「出る杭は打たれる」という文化規範が自己観に内在化されてしまうという考え方である（Kitayama, Markus, Matsumoto, & Norasakkunkit, 1997)。2つ目の「他者に好印象を与えるための戦略」とは，私的にはどう思っていようと，公的には上記の文化規範に従った自己呈示（例：自信がない）を行う方が，他者から好印象を持たれるため，長期的に適応につながるというものである。この説明によれば，自己を主張したり，個人として高い自尊心を維持することよりも，他者と良好な関係を築くことが結果的に社会的な適応につながるという（Leary & Downs, 1995)。上記2つの解釈のうちどちらが働いているのかという問題の解決は，回答時の評価懸念を払拭しづらい顕在的指標の検討のみでは非常に難しい。

潜在的測度

このような問題を解決するため，Greenwald, McGhee, & Schwarz（1998）は，従来の顕在的測度に代わる新たな潜在的測度であるIAT（Implicit Association Test）を開発・導入した。現在，この潜在的測度を用い，人種，性別，老人に対する態度といったステレオタイプ測定，自己概念の測定，選挙において投票する候補者の予測や消費行動の予測等，幅広い範囲においての測定が試みられている。IATを用いることにより，自己呈示的影響，特に人種や性別，自己にかかわるようなセンシティブな評価にかかわる懸念を最小限にした測定が可能であることがこれまでのところ明らかになっている（Greenwald, Banaji, Rudman, Farnham, Nosek, & Mellot, 2002）。

潜在的な自己・他者概念の測定

IATを用いた自己概念の測定例の1つとして，ここでは顕在・潜在両方の自己他者評価を比較した，Kobayashi & Greenwald（in press）を中心に，研究を紹介する。

研究1では，アメリカ人（ワシントン大学生）45名と日本人（大阪大学生）56名を被験者とし，3つのIAT実験を行った。3つのIATとは，(1)自己，(2)親友，(3)一般的な自分の大学の学生という3つのターゲットと快語との潜在的な連合を測定するというものである。IATの測定には必ず対照概念が必要となるため，3種類のターゲット概念測定に際し，それぞれ「一般的な他者」という対照概念が用いられた。

このIATパラダイムの基本的仮定は以下のようになる。例えば自己IATであれば，自己と快語が同じ反応を共有している（一般的な他者と不快語が反応を共有している）場合は，多くの人にとってそれらの連合が強く反応しやすいため，反応時間が短くなる。他方，自己と不快語が同じ反応を共有している（一般的な他者と快語が反応を共有している）場合は，反応時間が長くなる。実際の分析に用いるのはIAT効果と呼ばれる指標であるが，これは難しい方の課題（本研究の場合は，自己と不快語が同じ反応を共有）から簡単な方の課題（自己と快語が同じ反応を共有）の反応時間を引いたものを指す。つまりIAT効果の指標が大きいほど，そのターゲットに対してポジティブな意味を持つことになる。

結果は，アメリカ人も日本人も，IAT効果の高い順に，親友，自己，そして自分と同じ大学の大学生，という順番であり，両被験者ともに同じ傾向を示していた。IAT効果が大きいほどそのターゲットに対してポジティブな評価を持つことになるので，潜在的にはアメリカ人も日本人も親友を好意的に評価していることが分かる。評価対象の主効果に関して多重比較を行ったところ，アメリカ人は親友，自己，他の大学生の全ての組み合わせで有意差が，日本人は自己と親友には有意差がなかったが，他の大学生との間には自己・親友ともに差があった。

先行研究の顕在的測度（e.g., Figure 2）と今回の潜在的測度の結果をまとめると，顕在的には，アメリカ人は自己が強くポジティブ視され，強い自己高揚バイアスが表出されている。日本人の場合は自己評価の評定値はアメリカ人よりも低く，一見すると自己卑下を表すという結果となっている。他方，潜在的測度の結果は，アメリカ人と日本人の反応は類似しており，親友が最もポジティブな評価を受け，次いで自己，そして大学生という順番である。

ここで注目すべきは，日本人の顕在的・潜在的な自己評価の結果が類似したものであるのに対し，アメリカ人の顕在的・潜在的な結果は大きく異なっていることである。そこでアメリカ人の顕在的・潜在的な自己概念について検討するため，研究2が行われた。研究2では，

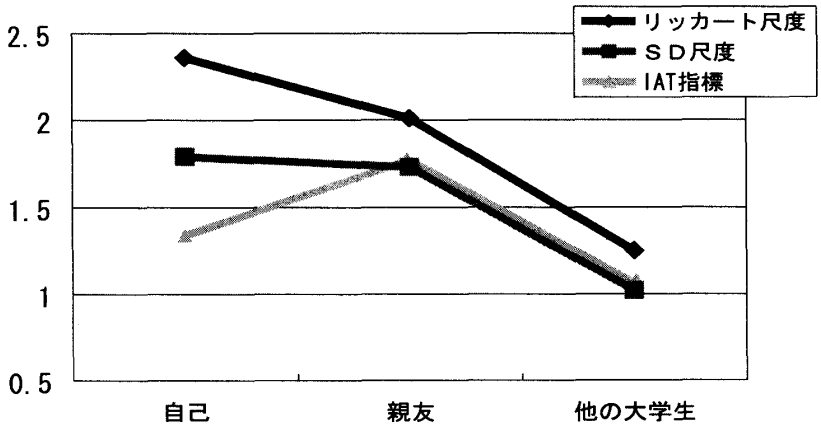

Figure 3：測度別による自己・他者評価の違い
注：Kobayashi & Greenwald (in press)のデータを再分析したもの

ワシントン大学生68名を被験者とし，研究1と同じ3つのIAT実験に，2種類の質問紙（7件のSD尺度，リッカート尺度）が加えられた。それぞれ，親切，明るい等の9つの形容詞を，自己・親友・一般的な大学生という3つの評価対象それぞれについて測定した。

尺度による反応の差を比較するため，データを標準化し，分析を行った。Figure 3に結果を示す。多重比較の結果，リッカート尺度の結果は，自己＞親友＞他の大学生という順で有意にポジティブ視がなされており，SD尺度では，自己＝親友＞他の大学生という順で有意にポジティブ視がなされていた。IATの結果は親友＞自己＝他の大学生という形の有意差が得られた。つまり，尺度の顕在性が高くなればなるほど，自己高揚の度合いが高くなっていることが分かる。アメリカ人は，日本人とは逆に自己・他者概念評価に際し，評価が顕在的になればなるほど自己をポジティブに表出するという結果から，自己呈示的影響の可能性があるのではないかと考えられる。

本稿では，日本人・アメリカ人の顕在的な自己評価の比較は行っていないが，Brown & Kobayashi（2002）では，本研究で用いられたリッカート尺度と全く同じ尺度を用い，日本人とアメリカ人の顕在的な反応の比較を行っている（Figure 4参照）。結果は，アメリカ人の場合は本研究とほぼ同じで自己が最も高く評価されていたが，日本人の場合は，潜在的な結果と同じように親友の評価が高く，自己がその次で，他の大学生という順序になっている。

これらの研究をまとめると，アメリカ人の潜在的・顕在的な結果には差が見られるが，日本人の潜在的・顕在的な結果には差が見られないといえる。換言すると，日本人もアメリカ人も潜在的には同程度に好意的な自己および親友評価を行っているが，アメリカ人は顕在的に自己を評価する際には非常にポジティブになるといえる。今後は，日本人が自己卑下や自己高揚を行う状況の解明に向け，顕在的指標のみならず潜在的指標をも含めた幅広いアプローチを用いた知見を積み重ねていくことが重要である。

自己・他者概念における日米の文化差存在の原因が自己呈示か文化的規範の内在化のどちらにあるか，という最初の問題については，次のように考えられる。両方の影響が存在するのは確かだろうが，アメリカ人は顕在性が高くなるに従って自己高揚的反応が強くなった（潜在的反応と顕在的反応が異なった）ことから，特に自己を測定する場合は，自己呈示と

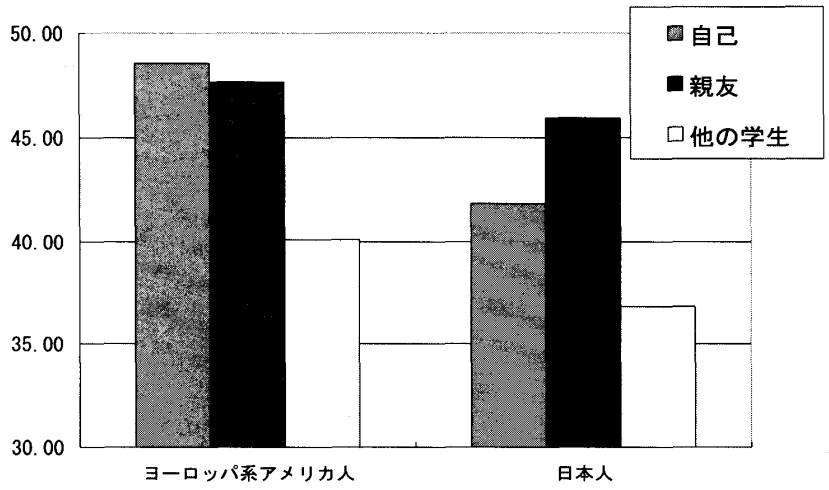

Figure 4：質問用紙を用いた自己評価比較研究の例
注：Brown & Kobayashi (2002)を元に筆者が作成。

いう影響力が大きく働いているのではないだろうか。同様に，日本人の自己卑下的反応も，自己呈示の影響が強く反映されている可能性が考えられる。文化規範に合わせ，日本人・アメリカ人ともに適応的に生きられるよう，自らの評価を調整しているのかもしれない。

「白人系アメリカ人とアジア系アメリカ人の Implicit Self-Esteem の比較：GNAT（The Go/No-go Association Task）を用いた Self と Others への連合の分離」

（潮村 公弘）

共同研究者は，Mahzarin Banaji（Harvard University）と Brian Nosek（University of Virginia）です。本日のワークショップでの発表内容につきましては，まだこれらの共同研究者との間でのコンセンサスが得られていませんので「未定稿」扱いとします。

ここで用いる方法はGNAT（Nosek & Banaji, 2001）と呼ばれている方法です。IAT（Greenwald, McGhee, & Schwartz, 1998）が相対的な Implicit Association を測定していることに対して，特定の個別概念に対して，Implicit Association を測定したいとして考えられた方法がこの GNAT です。

用語の定義

本研究においては，Implicit Self-Esteem（ISE とも略記します）とは，IAT あるいは GNAT によって測定された潜在的な自尊心，をあらわしています。操作的な定義が可能で，「SELF に対する Implicit Association と，OTHERS に対する Implicit Association の差異」として操作的に定義できます。具体的には SELF-GOOD の結びつきが強ければ強いほど，また OTHERS-BAD の結びつきが強ければ強いほど High Implicit Self-Esteem ということになります。

GNAT を用いて，SELF に対する Association と OTHERS に対する Association に分けることができ，それぞれに効果量が算出されます。第 1 に「SELF IAT 効果」は，SELF-BAD ブロック（incongruent 課題：一般に難易度が高い課題）での平均反応時間から SELF-GOOD ブロック（congruent 課題：一般に難易度が低い課題）での平均反応時間

を引いたものです。この値が大きいほど，SELF と GOOD の結びつきが強いことになります。「OTHERS IAT 効果」については，OTHERS-GOOD ブロック（incongruent 課題）での平均反応時間から，OTHERS-BAD ブロック（congruent 課題）での平均反応時間を引いた値で，この値が大きいほど OTHERS と BAD は Implicit レベルで強く結びついているということになります。

「Implicit Self-Esteem 効果」については，incongruent ブロック（SELF-BAD ブロックと OTHERS-GOOD ブロック）での平均反応時間から，congruent ブロック（SELF-GOOD ブロックと OTHERS-BAD ブロック）での平均反応時間を引いたものとして，総合指標を算出することもできます。GNAT を用いなくてもこの値を算出できますけれども，GNAT では，SELF については SELF という単一概念に対する Association だけを測定することができ，また OTHERS については OTHERS という単一の概念に対する Association だけを測定することができ，さらにこれらの総合指標も算出することができることになります。

研究の目的

目的 I：Implicit Self-Esteem を測度とした場合，WA（White Americans）と AA（Asian Americans）との間に差異は存在するのか検討します。

目的II：GNAT を用いたことの advantage を生かして，Implicit Self-Esteem を SELF IAT 効果と OTHERS IAT 効果に分離した上で，White Americans と Asian Americans 間での差異を検討します。

目的III：アジア文化的価値観（質問紙によって測定）における個人差と Implicit Measures（Implicit Self-Esteem 効果，SELF IAT 効果，OTHERS IAT 効果をまとめてこう呼びます）との関連性について検討します。

目的IV：Implicit Self-Esteem と Explicit Self-Esteem との相関について検討します。

GNAT（The Go/No-go Association Task）について

本研究では 2 つの GNAT が用いられました。ひとつは Simple GNAT，もうひとつは Idiographic GNAT です。Simple GNAT では，刺激語には代名詞が使用されたために，一般的な意味での SELF と OTHERS に対する潜在的な連合を測定します。もう一方の Idiographic GNAT では刺激語として個性記述的な語（具体的な名前，例えば，実際に住んでいる町の名前や，具体的な人名など）を用います。またこの場合，OTHERS が指している対象内容がどういうものかによって，Implicit Measures での得点が変動すると考えられますので，OTHERS として 3 つの条件を設定しました。OTHERS が「家族」をあらわしている場合の SELF-OTHERS(＝家族)GNAT では，OTHERS をあらわす刺激語として家族の名前が用いられました。それから OTHERS が「同じ民族」，すなわち同じ民族の構成員をあらわす場合である SELF-OTHERS(＝同民族) GNAT，そして，OTHERS が「異なる民族」，すなわち異なる民族の構成員をあらわす（具体的には，White Americans 被験者にとっては Asian Americans，また，Asian Americans 被験者にとっては White Americans をあらわす）場合である SELF-OTHERS(＝異民族)GNAT という 3 条件を設定しました。

2 つの GNAT 導入の目的

Simple GNAT が一般的な意味での SELF 概念・OTHERS 概念に対する潜在的な連合

を測定することに対して，Idiographic GNAT を導入した目的は，OTHERS の対象概念を要因操作することによって，OTHERS 概念に対する Implicit Measures がどのように変動するのかについて検討します。またそのさい SELF 概念についても，あわせて変容がみられることが予想されます。

Idiographic GNAT 課題の内容

Idiographic GNAT の場合には OTHERS 条件が 3 条件あり，これらの 3 つの条件ごとに4つのブロックがあることから，合計 3 × 4 の12ブロックが構成され，これらの全てをランダムな順序で呈示しました。したがって 3 つの GNAT でありながらも，実験セッション自体は 1 つだけとなります。

手続き

1)「インフォームド・コンセント」，2)「Simple GNAT」，3) 家族の名前（first name）と実際の呼び方を尋ねる質問紙への記入（自記式），4)「Idiographic GNAT」，5)質問紙を用いた Explicit Self-Esteem および関連変数の測定（具体的には，Rosenberg の Self-Esteem 尺度（Rosenberg, 1965），Feeling Thermometer，SD 法，Asian Cultural Identity Scale（Suinn, Rickard-Figueroa, Lew, & Vigil, 1987を改変），Collective Identity Scale（Luhtanen & Crocker, 1992）など）。なお，手続き4)と5)については，実施順序についてカウンターバランスがとられました。

被験者は Yale 大学の学生で，夏休み中であったために Summer courses を履修している学生も相当数含んでいます。White Americans と Asian Americans を対象としました。実際のデータ収集では，アメリカでの実験遂行は非常に制約がきつく，例えば，知り合いの Asian Americans や，パーティーに来ている Asian Americans の人たちに依頼するような個別の依頼は禁止されていたことなどもあり，結果的には，Asian Americans 男性のデータはほとんど収集できず，変則的ではあるのですが，白人系男性，白人系女性，アジア系女性を対象としました。

主要な結果と考察（Simple GNAT）

Ⅰ：Implicit Self-Esteem 効果の被験者群間差については，ISE 効果に被験者群間（3 群：白人系男性，白人系女性性，アジア系女性）の有意差は無く，トータルとしての ISE 効果には，明確な群間差は示されませんでした。

Ⅱ：IAT 効果（SELF IAT 効果 vs. OTHERS IAT 効果）要因×被験者群（3 グループ）の 2 要因（2 × 3）分散分析を行ったところ，交互作用効果が傾向差水準で有意となり，白人系男性群においては，OTHERS 概念と BAD 属性との結びつきが強いことが示されました。すなわち，OTHERS が「一般他者」を意味している場合，Implicit Association のエスニシティ差・性差は，OTHERS IAT 効果で生じ，白人男性の OTHERS 概念と BAD 属性の結びつきは他の被験者群よりも強いことが示されました。

Ⅲ：アジア文化的価値観（Asian Cultural Identity）個人差変数との関連

Ⅲ－Ⅰ：Implicit Self-Esteem 得点との関連

Implicit Self-Esteem 効果を被説明変数，Asian Cultural Identity スコアーを説明変数とした単回帰分析を実施したところ，結果は非有意であり，Implicit Self-Esteem 得点全体と，アジア文化的価値観との直接的な関連はないことが示されました。

III－II：SELF IAT 効果と OTHERS IAT 効果に分離した場合の関連

SELF IAT 効果と OTHERS IAT 効果を被説明変数，Asian Cultural Identity スコアーを説明変数とした単回帰分析を実施したところ，SELF IAT 効果については非有意である一方で，OTHERS IAT 効果については傾向差水準で有意な関連性が示されました。具体的には，Asian Cultural Identity が強いほど，OTHERS 概念と BAD 属性との結びつきが「弱い」という関係性が認められ，アジア系女性群において，アジア文化的価値観は OTHERS IAT 効果と関連を有していることが示されました。

IV：Implicit Self-Esteem と Explicit Self-Esteem の直接的関連性について Implicit Self-Esteem 効果，SELF IAT 効果，OTHERS IAT 効果と，顕在的な評価尺度群との間の相関分析を行ったところ，潜在的測度と顕在的測度間に有意な相関はありませんでした。これは，私的な問題領域に属するテーマであるような場合，あるいは，人前であるために自分の考えをストレートに出せないような状況では，一般に顕在的-潜在的測度間に相関がないという知見と一貫するものです。

主要な結果と考察（Idiographic GNAT）

Idiographic GNAT の分析は，いずれも 3 つの OTHERS 概念条件ごとに分析を行いました。

I：Implicit Self-Esteem スコアーを測度とした場合，被験者群間差は存在するか

Implicit Self-Esteem 効果を従属変数として，被験者群間差を検討したところ，OTHERS =「異民族」条件のみで，傾向差水準での群間差が示されました。白人系男性群での ISE 効果得点は，白人系女性群およびアジア系女性群よりも高い傾向にあることが示されました。すなわち，ISE 効果得点のエスニシティ差・性差は一般性の高いものではなく，OTHERS =「異民族」条件時でのみ，白人系男性群で ISE 効果得点が高い傾向にあることが示されました。

II：GNAT の advantage を生かし，Implicit Self-Esteem を，SELF IAT 効果と OTHERS IAT 効果に分離して，被験者群間差について検討

IAT 効果（SELF IAT 効果 vs. OTHERS IAT 効果）要因×被験者群（3 グループ）の 2 要因（2 × 3）分散分析を OTHERS 条件ごとに実施しました。その結果，OTHERS =「家族」条件で，傾向差水準での交互作用効果が示されました。具体的には，白人系男性群のみにおいて，SELF IAT 効果は OTHERS IAT 効果よりも小さいことが示されました。これは，OTHERS が Euro-American 文化で特に重要とされる「家族」をあらわしている場合において，社会経済的に dominant group である白人系男性群での特性を反映しているものであることが考えられます。

III：アジア文化的価値観（Asian Cultural Identity）個人差変数との関連

III－I：Implicit Self-Esteem 得点との関連

Implicit Self-Esteem 効果を被説明変数，Asian Cultural Identity スコアーを説明変数とした単回帰分析を行ったところ，いずれの OTHERS 条件においても非有意という結果でした。すなわちアジア文化的価値観は，「家族」「同民族」「異民族」という OTHERS 概念特定時には，Implicit Self-Esteem 効果と関連を有しておらず，このことは，これらの OTHERS 概念の対象が Euro-American 的な価値枠組みとの関連が深いものであることが

関連しているかもしれません。

III-II：SELF IAT 効果と OTHERS IAT 効果に分離した場合の関連

SELF IAT 効果と OTHERS IAT 効果を被説明変数，Asian Cultural Identity スコアーを説明変数とした単回帰分析を行ったところ，いずれの OTHERS 条件においても関連性は非有意であることが示されました。すなわち，アジア文化的価値観は，これらの OTHERS 概念特定時には，SELF IAT 効果，OTHERS IAT 効果と関連を有していないことが示されました。このことについては，前述のように「家族」「同民族」「異民族」という OTHERS 概念対象が Euro-American 的な価値観を強く反映しているためであることが考えられます。

IV：Implicit Self-Esteem と Explicit Self-Esteem の直接的関連性について

Implicit Self-Esteem 効果，SELF IAT 効果，OTHERS IAT 効果と，顕在的な評価尺度群との間で相関分析を実施しました。その結果，白人系女性群で OTHERS =「同民族」条件下でのみ，「自分自身」に対する顕在的評価と OTHERS IAT 効果とが傾向差水準で正の相関を示しました。このことは，「自分自身」への顕在的評価が高い白人系女性は，OTHERS（＝同民族）と BAD 属性との潜在的な連合が強いことを示しています。これは，刺激語の特性（具体的には，刺激語として用いられた白人系アメリカ人にとって典型的な family name の中に，男性の first name としても用いられる刺激語が含まれていたこと）による効果か，あるいは性別の点で subordinate group であると考えられる白人系女性群の特性を反映したもののいずれか，またはその両方でありうることが考えられます。

本研究のまとめ

目的 I，目的II（in Simple GNAT）：Implicit Self-Esteem 効果を，SELF IAT 効果と OTHERS IAT 効果に分離することによって，Implicit Measures のエスニシティ差・性差が検出されました。このことは，本研究において GNAT を採用したことによって SELF と OTHERS に対して独立に測定することが可能となったことによる意義でもあります。

目的 I，目的II（in Idiographic GNAT）：OTHERS 概念が変わることにより，OTHERS IAT 効果，SELF IAT 効果も変動することが示されました。

目的III：アジア文化的価値観は，SELF とではなく，OTHERS に対する潜在的な連合と関連を有していることが示されました。またアジア文化的価値観は，OTHERS の対象概念が主として Euro-American 的な価値枠組みに沿ったものである場合には，潜在的測度における影響は存在しないことが示唆されました。

目的IV（と目的III）：SELF という私的な問題領域においても，SELF IAT 効果と OTHERS IAT 効果を分離して測定した場合には，潜在的―顕在的測度間の相関関係が部分的に検出されることが見出されました。

本研究での制約と今後の課題

本研究の制約（Limitations）としては，アジア系男性群の欠落，サンプルの代表性の問題，順序効果についての完全な統制の必要性などを指摘することができます。

また今後の課題としては，アジア文化的価値観と関連の深い OTHERS 対象概念の設定，（アジア系アメリカ人だけではなく）アジア人を対象とした検証，性差についての系統的な検討が必要とされていると考えられます。

＜自己研究以外でのIATを用いた諸研究について＞

（小林　知博）

実験操作の有効性の検証：偏見・ステレオタイプの測定

人種・年齢・性別などに対するステレオタイプの測定は，顕在的指標では行いにくい。その理由は，特にネガティブなステレオタイプの保持が社会的に好ましくないため，他者からの評価懸念が働きやすいからだと考えられている。Dasgupta & Greenwald（2001）では，黒人・白人という人種ステレオタイプについて検討している。Dasguptaらは，黒人について，人気のあるスポーツ選手などポジティブな例を提示すると，被験者に自動的なpro-white（白人賞賛）的態度が減少することを示した。そしてその効果は24時間持続した。また，Blair, Ma, & Lenton（2001）では，反ステレオタイプ的な強い女性を想像するようなメンタル・エクササイズを行った被験者は，統制群に比べてIATで測定するステレオタイプが減少したという結果を報告している。ステレオタイプ自体の測定が難しい中，潜在的測度を用いることにより，ステレオタイプを減少させることができたという研究は興味深い。

IATを用いた個人差測定

Asendorpf, Banse, & Mucke（2002）では，シャイネスの自己認知と実際の行動予測について研究を行っている。シャイネス指標は質問紙とIATの両方で測定し，シャイな行動との相関を検討している。その結果，顔や手を触るなどの無意識的なシャイ行動は，IATで測定したシャイネス指標が高い相関を持ち，スピーチの長さなど意識的にコントロールできるシャイ行動は，顕在的なシャイネス指標と相関していることが示された。

生理指標とIAT指標との相関についての検討

Phelpsら（Phelps, O'Connor, Cunningham, Funayama, Gatenby, Gore, & Banaji, 2000）は白人被験者を用い，知人でない黒人や白人の写真を見たときの脳の反応と，顕在的・潜在的に測定した人種ステレオタイプとの相関について検討した。結果，IATにて潜在的に高いステレオタイプが測定された被験者は，黒人の写真を見たとき脳の扁桃（感情を制御する大脳の皮質部分）が活性化されたが，白人の写真では，そのような結果は得られなかった。また，知人の写真を用いた場合にも，そのような結果は得られなかったと報告している。

このように，従来，顕在的指標を用いた研究で明らかになっていた行動は，主に顕在的にコントロールできるものであった可能性があり，それに潜在的な指標や行動を付加すると，今まで焦点が当てられていなかった行動にまで予測の範囲が広がる可能性がある。筆者は，潜在・顕在的指標の優劣性については考えておらず，潜在的指標の導入によってさらに人間行動の解釈の幅が広がれば良いと考えている。

＜引用文献＞

Asendorpf, J. B., Banse, R., & Muecke, D. (2002). Double dissociation between implicit and explicit personality self-concept: The case of shy behavior. *Journal of Personality and Social Psychology*, **83**, 380-393.

Blair, I. V., Ma, J. E., & Lenton, A. P. (2001). Imagining stereotypes away: The moderation of

implicit stereotypes through mental imagery. *Journal of Personality and Social Psychology*, **81**, 828-841.

Bosson, J. K., Swann, W. B., Jr., & Pennebaker, J. W. (2000). Stalking the perfect measure of implicit self-esteem : The blind men and the elephant revisited? *Journal of Personality and Social Psychology*, **79**, 631-643.

Brown, J. D. & Kobayashi, C. (2002). Self-enhancement in Japan and America. *Asian Journal of Social Psychology*, **5**, 145-168.

Dasgupta, N. & Greenwald, A. G. (2001). On the malleability of automatic attitudes : Combating automatic prejudice with images of admired and disliked individuals. *Journal of Personality and Social Psychology*, **81**, 800-814.

Greenwald, A. G. & Banaji, M. R. (1995). Implicit Social Cognition : Attitudes, Self-Esteem, and Stereotypes. *Psychological Review*, **102**, 4-27.

Greenwald, A. G., Banaji, M. R., Rudman, L. A., Farnham, S. D., Nosek, B. A., & Mellott, D. S. (2002). A unified theory of implicit attitudes, stereotypes, self-esteem, and self-concept. *Psychological Review*, **109**, 3-25.

Greenwald, A. G., & Farnham, S. D. (2000). Using the Implicit Association Test to measure self-esteem and self-concept. *Journal of Personality and Social Psychology*, **79**, 1022-1038.

Greenwald, A. G., McGhee, D. E., & Schwarz, J. L. K. (1998). Measuring individual differences in implicit cognition : The implicit association test. *Journal of Personality and Social Psychology*, **74**, 1464-1480.

Heine, S. J., & Lehman, D. R. (1999). Culture, self-discrepancies, and self-satisfaction. *Personality and Social Psychological Bulletin*, **25**, 915-925.

Heine, S. J., Lehman, D. R., Markus, H. R., & Kitayama, S. (1999). Is there a universal need for positive self-regard? *Psychological Review*, **106**, 766-794.

James, W. (1892). *The principles of psychology* (vol. 1). New York : Holt.

Kitayama, S., Markus, H. R., Matsumoto, H., & Norasakkunkit, V. (1997). Individual and collective processes of self-esteem management : Self-enhancement in the United States and self-depreciation in Japan. *Journal of Personality and Social Psychology*, **72**, 1245-1267.

Kobayashi, C. & Greenwald, A. G. (in press). Implicit-explicit differences in self-enhancement for Americans and Japanese. *Journal of Cross-Cultural Psychology*.

Leary, M. R., & Downs, D. (1995). Interpersonal functions of the self-esteem motive : The self-esteem system as a sociometer. In M. Kernis (Ed.), *Efficacy, Agency, and Self-Esteem*. New York : Plenum.

Luhtanen, R., & Crocker, J. (1992). A collective self-esteem scale : Self-evaluation of one's social identity. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **18**, 302-318.

Markus, H. R. & Kitayama, S. (1991). Culture and the self : Implications for cognition, emotion, and motivation. *Psychological Review*, **98**, 224-253.

Nosek, B. A., & Banaji, M. R. (2001). The go/no-go association task. *Social Cognition*, **19**, 625-666.

村上史朗・山口勧（2001a）. The Implicit Association Test による潜在的自己観の検討　日本グループ・ダイナミックス学会第49回大会発表論文集（熊本大学）

村上史朗・山口勧（2001b）. The Implicit Association Test による自己と内集団に対する潜在的評価の検討　日本社会心理学会第42回大会発表論文集（愛知学院大学）

Phelps, E. A., O'Connor, K. J., Cunningham, W. A., Funayama, E. S., Gatenby, J. C., Gore, J. C.,

& Banaji, M. R. (2000). Performance on indirect measures of race evaluation predicts amygdala activation. *Journal of Cognitive-Neuroscience*, **12**, 729-738.

Rosenberg, M. (1965). *Society and the adolescent self-image*. Princeton, NJ : Princeton University Press.

Suinn, R., Rickard-Figueroa, K., Lew, S., & Vigil, P. (1987). The Suinn-Lew Asian Self-Identity Acculturation Scale : An initial report. *Educational and Psychological Measurement*, **47**, 401-407.

山口勧・村上史朗（2000）. 日本人の肯定的な自己概念：Implicit Association Test による検討 日本グループ・ダイナミックス学会第48回大会発表論文集（東洋大学）

Advances in Implicit Social Cognition : Introduction to the IAT (Implicit Association Test) Method

KIMIHIRO SHIOMURA (Shinshu University, Faculty of Arts)
FUMIO MURAKAMI (University of Tokyo, Graduate School of Humanities and Sociology)
CHIHIRO KOBAYASHI (Osaka University, Graduate School of Human Sciences)

ABSTRACT

We intend to make progress in IAT (Implicit Association Test) method and implicit social cognition research in Japan by publishing this paper, which consists of the following contents, that is, explanations of the basic principles of IAT, actual execution of IAT, the points enough attention should be paid, the brief outlines of empirical research had been done by Japanese researchers, and descriptions of the variety of the IAT in social psychological area. We adopted the style of reporting the record of a workshop that was held at the annual conference of the 66 th Japanese Psychological Association.

Key words : IAT (Implicit Association Test), GNAT (The Go/No-go Association Task), implicit self, cross-cultural research, implicit social cognition.